

診療経過一覧表

年月日	診療経過 (入通院状況・主訴・所見・診断)		検査 処置	証拠	認 否	原告の主張	証拠
	初診 前の 状況					原告は、6歳ころ小児麻痺により半身不随となる。その後、リハビリより、肩及び肘は正常に動くようになり、右手首の可動域は約10%、右手指の可動域は約20%あり、自転車ハンドル程度の太いものは握ることができた。	
H24. 7. 18	初診 診断	H病院：右手関節痛を訴えて外来受診した。 D医師：右手関節挫傷と診断した。 原告の右手が脳性麻痺の後遺症としてのアテトーゼ型痙性麻痺手を呈していることを認識していた。 (この時点で、原告は、既に右手月状骨壊死に罹患していた。)	X線検査(乙A5の1) 湿布 弾性包帯固定 内服薬処方	乙A1P2	○ △ ×	原告が右手月状骨壊死に罹患したのは、H25. 7. 24より後のことである。	乙A1P9
H25. 5. 22	外来 受診 診断	H病院：右手背に腫脹が発生したとして外来受診した。 D医師：右手軟部腫瘍と診断した。	穿刺排液 (同月 22, 26, 30 日)	乙A1P6	○ △		
H25. 7. 10	外来 受診 診断	H病院：右手背部に腫瘤を発見したので外来受診した。 D医師：右手関節軟部腫瘍と診断した。 原告手術希望で、手術予定を組む。	X線検査(乙A5の4)	乙A1P7 乙A1P1 乙A1P7	○ △		
H25. 7. 19	入院	H病院：手術のために入院		乙A 3	○		
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
H26. 1. 31	転院 診断	T病院 痙性麻痺、右手月状骨壊死と診断	X線検査 クーリング 継続		×	T病院では、クーリングは行っていない。	
H26. 2. 9	手術	T病院：右手月状骨壊死症に対し、①月状骨摘出、②腱球移植の手術を、痙性麻痺手に対し、①母指IP関節固定、②尺側手拵伸筋切離の手術を、双方に対し、①カパンジー法の手術を実施した。			△		